

バッファロー・ドッグ

ローレンス・M・ショーン

日本語訳：ローラ・スファアー／町田一彦

©2001

地球に戻るほんの何日か前に逮捕されるなんて、思ってもみなかった。俺はこの三週間半、リル・ドッジ（訳注：小さなワンちゃん）というギブラールで唯一のスペースポータルラウンジで働いていた。俺は一晩に二回ステージを演じる契約だった。土曜日は昼間の興行が一回追加になって、日曜日は休み。ギブラールの一日は間違いなくほぼ二十四時間だけど、一週間は七日間ではなくて八日間だった。地球にいる俺のエージェントがこの余分な一日のことを調べずに週給契約を結んでしまった。そのおかげで、俺はギブ曜日の二ステージをサービスとしてやる羽目になった。つまり無償労働だ。

ラウンジの前に掛けられた看板には「催眠術のマスター、驚異のコンロイ」と書かれ、そこにはカラフルな色がゆらゆらと回転して露骨に人の目を引いていた。実際、効果もあった。小さな観客でも十分な人数集まったし、大きな観客がいるとラウンジは一杯だった。ギブラールのような所では人々はいつもどんなエンターテイメントにも飢えていて、催眠術の舞台はかなり大繁盛だった。

観客の中の人類はみんな同じ目的でギブラールに来ていた。誰も彼も例外なくバッファロードッグ貿易に関わっている。バッファリト（訳注：バッファロードッグ）はギブラールの唯一の資源として、直接・間接にかかわらず人をギブラールに集めることができるただ一つの産物だ。ここは殖民星だけど、俺達のじゃない。アルコンの領地であるギブラールでは、人類の入植地は一キロメートル四方に制限されている。ルールを作るのはアルコン。そして、彼らが地球の欲しいものを持っている以上、俺達は小さな良き人類としてそのルールに従う。だからこそ俺は逮捕されちゃったんだ。

その日の早いうちに、バッファロードッグ配達人が一人密輸未遂の罪でアルコンに逮捕された。事務処理のミスが原因だと地球領事館が弁明したが、アルコンは真実に関する限られたサイキック能力を持っていて、そのために見破られてしまった。アルコンの司法は迅速だ。その配達人が裁判にかけられ、有罪判決を受けて処刑されたのは、同じ日の俺のディナーショーが終わる前だった。

誰も彼もが憂さ晴らしを求めていた。良かれ悪しかれ、俺がその憂さ晴らしの役目だった。俺はショーの始めに冗談を言い、観客の緊張をほぐして安心させた。見世物とはいえ、俺が眉毛を上げるだけで男に暗い秘密を告白させたり女に俺に胸に飛び込ませたりしてみせると、催眠術を見るのを怖がる客もいる。いや、出来れば怖がらないで欲しいもんだが。何百年前に、アントン・メスメルはそういうことができたって話だ。多分あいつには俺のよりいい相棒がいたっていうだけだ。とにかく、俺には強力な誘導と五分の静けさが必要だった。俺が失敗した時のために外で車が待っていたことについては、触れないでおこう。催眠術を使った恐喝や誘惑は面白い見世物になるけれど、現実には筋書きに従うほうが安全だ。俺も遊んだり突っ込んだりすることが全くないわけじゃないが、ショーの間にそういうことはしない。でもショーの後は別の話だ。いつ役に立つかわからないから、俺はいつもステージを演りながら後催眠の「バックドア」を仕掛けるんだ。一週間経っても、俺がトリガーフレーズをささやくと相手がパッとトランス状態に戻り暗示を受けやすくなる。やっぱりこの仕事は俺のお気に入りだ。

いつものショーと変わらず、その夜も多くのテーブルにアルコンが座っていた。五十のショーの間、笑ったり微笑みでさえも浮かべたりしたアルコンは一人もいなかった。連中もきっと微笑めるはずだと思うが。アルコンはビックリハウスの鏡に映ったみたいなの、引っ張られたのっぽの人類のようだ。肌はざっと卵の殻からページュにかけての白っぽい色で、体の毛は漫画のヒーローの髪のような鳩羽色だ。口や唇や歯も持って俺が知っている限り人類と同じように使うけど、アルコンの顔に微笑が浮かぶのは一度も見なかったことない。彼らはショーを楽しまないわけじゃなくて、ただショーが理解できないんだ。アルコンは真実が分かるせいだ。アルコンはいつも相手が正直に話しているかどうか分かっちゃう。アルコン同志では誰も嘘をつかない。単純に嘘をつけないからだ。これは些細なことだが、良く考えてみると人類の歴史は至る所ウソだらけだってことに気がつくだろう。

アルコン社会では犯罪がほとんどない。確かに、俺達と同じくアルコンが出来心で罪を犯すこともあるけど、地方判事が一つ質問するだけでどんな犯罪の芽でも摘むことができる。人類と付き合うようになる以前、アルコンには「嘘」という概念さえ存在しなかった。アルコンから見れば、俺達は魅惑的に奇妙な生き物だ。俺達が魚の鰓の働きを知るみたいに、アルコンにとって「嘘」というものは面白い理論上の可能性であって、自分達と無関係の客観的で安全な知識なんだ。

催眠術で、明らかに偽りであることを人に真実だと信じ込ませるのを見たがるアルコンも結構いる。俺が着いた時から、アルコンが毎晩ショーを見るべく人類の街へなだれ込んできた。俺は最初、人類だけではなくアルコニ（訳注：アルコン人）のボランティアも舞台に上げた。彼らも人類と同じく催眠にかかった。アルコンに鶏のように鳴かせるのは朝飯前だったが、客観的な現実に沿わない暗示を受け入れさせるのは無理だった。全く想像力のないアルコンは本当に鶏になったと信じるのが出来ない。連中ではかったるいショーになっちまう。それでアルコンを舞台に上げるのはやめてしまった。

とにかく、その日もギグの最後の週でいつもと同じショーをやっていた。幕開けの十分後、二人の若い秘書、年配の銀行融資担当と中年の警備員が舞台の上で催眠にかかっていた。アルコンの外交官だと思っている秘書に「人類を啓発する為の計画」を説明させた。もちろんそういう計画は存在しないけど、そんなことは秘書／外交官達が知る訳もない。観客の人類がげらげら笑っている間、秘書達は真摯な顔をして、ナンセンスな作り話を詳しく述べた。

陳述を終えた秘書達は観客の中の人類達から割れんばかりの拍手喝采を浴びた。「ご苦労さまでした」と言って、俺は秘書達を「地球の豪華なアルコン大使館」と暗示した椅子へ導いた。彼女達を深催眠状態に戻した。秘書達が驚くほどオリジナルで機知に富んだ仕事をしてくれたものだから、観客達は次に何が起きるかと思いを呑んでいた。俺は警備員の方を向いて、観客に歯を見せながらウインクして、合図を出した。

ショーの始まりで植えつけたトリガーフレーズの「バタースコッチ・メルポメネ（訳注：ギリシア神話の女神）」と彼女に囁く。動作というより態度のレベルで彼女の姿勢は変わった。体は完全にくつろいでいるのに、脳は切ないほど待っている。俺は観客に向けて「冗談に乗ろう」と誘うように手を振った。

「あなたはギブラルの住民です。」と俺は落ち着いた深く響く舞台声で言った。「あなたは頭がよく、学歴が高く、世慣れてる雄弁な人です。」目を閉じたまま、自信ありそうな落ち着いた顔で、警備員は居まいを直した。「差し支えなければ、あなた独自の見地からギブラルについて話していただきたい。よろしいですか？」

彼女は唇を舐めながら頷き、身振りを始めようと片手を上げた。

「いいですね。私が三まで数えると、始めます。」と俺が言った。「あ、あともう一つ。あなたは人類じゃなくてバッファロードッグです。一、二・・・」

「やめろ！」後ろのテーブルにいたアルコンが急に立ち上がった。俺はそのアルコンのことをよく覚えていた。最初から毎晩ラウンジに来て、ショーをよく見ていた本物のお得意さんだ。一度は被験者までやってくれて、アルコンとしては比較的好い被験者になってくれた。名はロヨカ。そのロヨカが今俺に武器を向けている。観客の大半は、これもショーの一部だと思って笑っていた。でも俺は違った。

「舞台にいる全員を逮捕する。」とロヨカが続いた。「動くな。協力する者は傷つけない。」

ロヨカは長い足で苦もなしにころりと舞台上に登った。レーザーサイトの輝きを見た瞬間、俺は凍りついてしまった。警備員に近付き目を合わせるようにうずくまって、アルコンはこう尋ねた。「あなたはバッファロードッグですか？」

アルコンが本気であることにまだ気づいていない観客がほくそ笑む。女は回答をしなかった。回答できなかったのだ。彼女には俺の声しか聞こえない。ロヨカはすぐそのことに気付いて俺の方を振り向いた。「この女はどうして話さないのです？彼女は雄弁であると言ったでしょう。」

「まだ三まで数えていないもので。」と俺は言った。「私が『三』と言うまで、命令を実行しません。」

「三！」と警備員を見つめながらアルコンが言った。彼女の調子はちっとも変わらない。観客からくすくす笑いが聞こえた。ロヨカが振り返らずにこう言った。「あなたが言いなさい。」

「三」と俺が呟くと、警備員が目を開けてニッコリしながら、自分の顔から十センチも離れていないアルコンの顔の前で頷いた。

「あなたはバッファロードッグですか？」とロヨカが繰り返した。

「ええ、もちろん」と警備員は頷いた。「ギブラールで生まれた私はどんなに辛い人生を送ったことか。私がまだここにいるのは奇跡だよ。あんた達アルコニのせいで、私の兄弟や幼馴染はみんな他所の惑星に送り出されてしまった。恥ずべき行為だよ。本当に恥だ。」

彼女はとりとめもなくしゃべり続けて、胡桃の大きさくらいの脳しか持たない異星の生物の履歴を作り出した。その話を聞いて、アルコンの開いた口はどんどん広がった。彼女は自分が言っていることを本当に信じているということがサイキックで分かるロヨカには、彼女のことをどう見ても本当にバッファロードッグであると思うしかないんだ。

十分後、俺は拘留されて留置場の中に座っていた。俺に分かる限り、トランス状態から開放された四人のボランティアも同じく抑留されていた。俺の太陽系外旅券は没収された。取り調べが終わるまで、リル・ドッグは閉鎖されることになった。マネージャーが俺のエージェントに文句を付けて、おまけに汎銀河芸能人組合に訴訟を起こそうとしていた。ショービジネス界ではブラックリストは致命的だ。この苦境を乗り越えることができても、これから地球でしか働けなくなるだろう。だが、今の俺にはもっと切実な問題があった。

何時間も経った。最初の一、二時間で、アルコンがなぜ怒ったかを理解しようとして、頭の中でショーを何回も再現した。しかし何もわからない。やがてうとうとと居眠りし始めたときドアが開いてロヨカがもう二人のアルコンと一緒に牢屋に入ってきて、俺もすぐに目が覚めた。三人とも低いスツールを引きずってきた。それに腰を下ろし足を床に付けると、曲げた膝は肩の高さまで上がった。簡易ベッドに座っている俺と視線を合わせるようになった。三人は俺をじろじろ見ていた。

「嘘を言いなさい。」と右のアルコンが言った。

「嘘を？」と俺が聞いた。三人の厳しい顔を順番に見つめた。目は人類の目と全く同じだが、それは慰めにもならない。

「そう、コンロイさん。自分で真実だと思っていないことを言いなさい。今すぐ。」とそのアルコンが言った。

俺は呆然とした。打ち切られたショーのことしか頭に浮かんでこない。

「私はアルコンの外交官です。人類を啓発する為の計画があります。」と俺が言った。

二人の新人が顔をしかめた。俺が言ったのは今夜のショーからのセリフだと分かるロヨカはほんのりと唇の角をあげた。やはり笑えるんだ。

左のアルコンが顔をさらに曇らせた。「君は嘘をついている。」

「嘘をつくように言ったでしょう。」俺が肩をすくめる。

「そうだ。君が嘘をついているのが分かる。だが、ステージで君は他の人類に様々な行動をさせている。その行動は嘘ではない。」

俺は頭を振った。「すみません。迷惑をかけたいわけじゃないんだが、あなたが何を言おうとしているのかさっぱり分からない。」

「コンロイさん。あなたは密輸者ですか」とロヨカが聞いた。

「私は何だって？」

「あなたはバッファロードッグの密輸者ですか。『はい』か『いいえ』で答えてください。」

「違う！」と俺が言い切った。胸の中で、恐怖が広がっていた。

「しかし、コンロイさんはあの女を」ロヨカが小さいパームパッドに目を落とした。「カルラ・エスピノザをバッファロードッグにしました。それは真実です。彼女の心にそれが見えました。」

「しかし、彼女は本当はバッファロードッグじゃないでしょう！」俺は笑ってしまった。これは全部何かの冗談だろう。だが違った。アルコン達は大真面目な顔をしていた。

「それは違います。私自身が真実を確認しました。彼女はバッファロードッグそのものでした。無許可のバッファロードッグです。コンロイさん。」仲間と同じようにロヨカが顔をしかめる。「この罪の重さが分かりますか？告訴状によれば、あなたは盗まれた生殖可能なバッファロードッグを地球に輸出しようとしているんです、コンロイさん。」

俺は唾然とした。ギブラルルの数少ない原住生物の一つであるバッファロードッグは、知られている限りこの宇宙で唯一の生き物だ。バッファロードッグは五分の一に縮小したアメリカのバイソンにそっくりで、毛深くてかわいらしい頭を持ちぺろりとちっぼけな青い舌を出してマーと鳴く、すごくかわいい動物だ。何でもかんでも餌にして増えることが出来る。だがもっとも驚くべきことには、純粋な酸素分子のおならを大量に出すのでバッファロードッグはテラフォーミングにうってつけなのだ。埋立地を窪地にしてしまう点、地球上の有毒物質で使えない土地を人が住める土地にしてしまう点には触れなくても十分だろう。どんな夜でも、リル・ドッグでは譲渡許可書の入っている細いバインダーとバッファロードッグを両方の小脇に抱えて次の地球へのフライトを待つ輸送人が観光客の四分の一を占めている。バッファロードッグの唯一の源を支配するアルコンは、一匹当たり千万クレジットで不妊なドッグを輸出した。それだけの値段がするバッファロードッグを密輸するのは魅力的だし、不妊の仔ドッグが盗まれる事件も多い。当然アルコン政府が特別厳しく反応した。バッファロードッグの密売の関係者と疑われた人は死刑判決を受ける場合もある。これは本気でやばい。

「でも、あの女はバッファロードッグじゃなかった。」とベッドから立ち上がって俺は抗議した。「生物学的にバッファロードッグじゃなかった。」

肩に手を置いてロヨカが俺を押し戻した。「彼女の心に見たものは確かです。彼女はバッファロードッグでした。ギブラルルでは、バッファロードッグを所有している人類は間違いなく輸送人か密輸者のどちらかです。コンロイさんの心の中に真実が見えます。あなたは密輸者ではない。」

ちょっと間を置いて両側に座る仲間にも目を向けた。無言の合意に達したように、三人は立ち上がった。

「これは重大な問題です、コンロイさん。我々は犯罪の容疑でも深刻だと考えます。あなたを待たせている間に公式の施設を徹底的に搜索しました。行方不明になったバッファロードッグの報告が出されていないので、あなたを窃盗罪で告訴しません。そしてカルラ・エスピノザは不妊なので、他の罪で起訴できません。」

どんどんおかしな話になってゆく。「カルラ・エスピノザは不妊だとなぜ分かるんです？」俺が聞いた。

ほんの少しだけロヨカは俺の方にちらりと目を向けた。「徹底的な診察をしました。生殖可能なバッファロードッグを所有する人類は例外なく死刑となります。でもカルラ・エスピノザは妊娠できません。免許を持っている配達人は不妊のバッファロードッグを輸送することを許可されます。後は書類を片付けることだけ。カルラ・エスピノザにタグを付けた上、免許証の申し込みを用意しました。」

ロヨカの傍にいたアルコンの一人が、パームパッドとスタイラスを差し出した。俺はドキュメントを一見してからサインした。アルコン達はギブラルルで稼いだ俺の金の大半を引き落とし、その二倍の金額の担保権も付けてしまった。こうして俺は公認の配達人になった。

「おめでとうございます、コンロイさん。通常の価格の千万クレジットを払わずにバッファロードッグが手に入りました。」その声には皮肉の色はちっともない。大真面目で話していた。

「でも、彼女は今バッファロードッグじゃないでしょう。」と俺が言った。「トランス状態ももう解けている。自分は誰だか分かるはずです。」

三人のアルコンはまた顔をしかめて不安そうにそわそわした。そして二人がスツールを取って牢屋を出た。残されたロヨカだけがお別れの言葉をいう。「我々はコンロイさんの術を完全に理解しているとは言えません。今夜の催眠術被験者が、自分自身のことをバッファロードッグであると理解していたのは明らかでした。しかし、ある意味で彼女はバッファロードッグではなかったことも明らかでした。この出来事は我々にとって得体の知れないものです。ギブラールにいる間はコンロイさんのことを監視しますので、今後も気を付けた方がよいでしょう。行っていいです。」とドアを開けながら言った。「フロントデスクの係員に声をかけて下さい。そちらで旅券と免許証のハードコピーを渡します。カルラ・エスピノザも預かっています。」右の方へ指差し俺を見送る。彼は左に向かって廊下の曲り角を折れて消えた。

ロビーに行くと、カルラ・エスピノザが数珠つなぎのように並べた椅子に座っていた。顔色はちょっと青いが怪我はなさそうだ。左耳から2センチ位の大きさのプラスチックディスクが垂れ下がる。輸送のためにタグ付けられたんだ。俺が近寄って行くのが見えるとぼうっとした表情がみるみる怒りに変わった。声が届く範囲に入ると俺はすぐに謝りはじめた。

「エスピノザさん、どうもすみません。こんなことになるとは想像しませんでした。どうか信じて下さい。」

彼女は俺を睨みながら立ち上がった。俺より二十センチ以上背が低く、二十歳以上年上だ。一見したところ、ずっと警備の仕事を送り歩く生活を送ってきた人だ。俺より十キロも体重が多いけど、その十キロは筋肉ばかり。目に浮かぶ表情から、カルラ・エスピノザにとって俺をやっつけるぐらいは朝飯前のことだとはっきり分かる。彼女は手を上げて、耳たぶに付けたプラスチックタグをガリガリと引っばった。クリップがカチリと開いてタグを俺のほうに投げた。「ここが地球だったら、あんたとあんたの三代目の子孫までを絶対に訴えてやるところだ。」と言った。「あんたにとって運がいいことに、ここでは弁護士が禁止されている。」

投げられたタグを受け、ポケットに入れた。高価な土産だな。カルラに俺のクレジットチップを手渡した。「金があまり残ってないんです。どうか、受け取ってください。預金の大半は免許料金に使われてしまいました。」

「免許の料金？」と聞かれた。

俺は弱々しい微笑みを浮かべた。「私はバッファロードッグを所有しているけど、密輸者じゃない。だから私は配達人のはずで、通常の料金を支払う必要がある、と判断されたんです。」

これを聞き、カルラは怒るのをやめて笑い出した。ギブラールに来て結構経っているので、免許料金がどれだけ高いかよく分かっているのだ。これで満足したようだ。彼女はポケットにクレジットチップを入れた。「今日のことは忘れてやるけど、二度とお前の顔を見せるな。今度会ったらお前を穴だらけにしてやる。真空を散歩する方が楽だと思うほど痛い目に合わせてやる。分かったな。」

俺はなんとか怯えた表情を見せずに頷いた。カルラはもう一度俺を睨みつけて、ぷりぷりしながらロビーを出た。ロビーの後ろにあるデスクに座っている事務員は無言でこの場面を見ていた。アルコンなのに顔が真っ青に見える。無理もないだろう。カルラ・エスピノザの言った言葉が全て聞こえただけでなく、それが本気だということもわかったのだ。俺は免許証のハードコピーをまとめ外へ出た。

ギブラールの淡い太陽が高く見上げる位置にあるのを見ると、正午の直前だろう。俺にはやることも払う金もなかった。地球への宇宙船の出発までは一日たっぷりある。催眠トリックでもやって食事と寝床を手に入れようと、スペースポートの中心街へ向かうとしたそのとき、見苦しいほど新しいスーツを着てる男が俺と並んできた。最初はリル・ドッグのマネージャーが俺に思い知らせるつもりかと思ったが、こいつはヤクザにしては体が小さすぎて学生っぽ過ぎる。きりっとして上品な大金持ちの息子の典型で、一流のアイビーリーグ大学でオンラインMBAの学位を取っているに違いない。俺も体格良くはない方だが、こいつは俺と比べてもチンチクリンだ。

しばらくして彼に見覚えがあることに気付いた。彼に催眠術をかけたことがある。地球企業へのバッファロードッグ輸入を仲介する会社の人間の一人だ。他の大勢のサラリーマン達やクライアント達と一緒にリル・ドッグでのプレミアショーに来ていた。彼のテーブルに座っていた人の半分に催眠術をかけたことがある。クライアント達がショーを非常に面白がったので、この人はお礼として過大なチップをはずんでくれた。ギブラールのバッファロードッグの中でも大金になるものはほんの少しだけなのに。惜しげもなくチップを払ったり新しいスーツを着たりできる人だ。

「コンロイさん、」とその太っ腹が言った。「こんな失礼な方法で連絡して、申し訳ありません。コンロイさんにお話ししなくてはならないことがあるのです。お願いがあります。」

最低の事態になったと思ったら、インチキサラリーマンがで出てきちゃった。上等だ。「悪いね。俺はヘトヘトで、腹ペコで、あんたが売ってるものなんかに興味がないんだ。」と言ってやった。

彼は話し続けた。「コンロイさん、私はジェンセンと申します。一応聞いておいてください。ザ・プレーリーに行って、少しくつろぎましょう。もちろん私がおごります。食事をとって、ゆっくりして、私の申し入れを聞いていただいてから、まだ興味がなかったらそれでも構いません。」

聞いて俺は立ち止まった。ザ・プレーリーというのはギブラールにある唯一の五つ星レストランで、この一キロ四方の街の他のどのレストランよりも星二つほど上だ。前菜だけで一週間の給料が飛んじまう。ジェンセンの肩に腕を回してくたたくたの笑みを浮かべた。「ジェンセンさん、これから昼飯にするならなんなりと伺いましょう。」

ほっとした顔をしながらジェンセンは俺をザプレーリーに案内してくれた。メイトル・ディー・ホテルがぴったりのディナージャケットを貸してくれ、俺はエレガントなテーブルに向かってに座って料理を待つ間、クレームフレッシュがまぶされたポテトのミュージズグール、サーモンとキャビアを味わいながらこれまで想像したこともない旨いワインをすすっていた。気分はすっかりしたがジェンセンには用心深い目を向けた。おいしい餌の後ろには痛い釣り針があるはずだ。

その言葉通り、ジェンセンは話し始める前に俺をしばらくくつろがせてくれた。彼が胸ポケットに手を入れパームパッドを抜き取ったのは、俺が一皿目（ササゲ、レイヨウの胸腺、マッシュルーム、ワイルドドラズベリーのアレンジ）に手をつけた頃だった。

「率直にお話させて下さい。ワダ財閥での上司は、コンロイさんの最近のトラブルとそんなことになってしまった、やむにやまれぬ事情について存じあげております。よろしければ、私達にお手伝いさせてください。つまり、コンロイさんを雇いたいです。」

聞いて、思わずワインが喉に詰まりそうになった。グラスを置いてナプキンで口を拭いた。「催眠術師を、と言うことですか？ジェンセンさん。」と俺は聞いた。

「違います。私達に必要なのは配達人です。私達が代表する会社は、明日出発する宇宙船で三十二匹のバッファロードッグを輸出する予定になっています。そのバッファロードッグは全部売約済みで、配達を保証もついています。アルコンの法律によって一人の公認配達人が運べるバッファロードッグは一度に一匹だけに制限されていますが、現在のところ、私達は三十一人の配達人しか確保できていないのです。」

困惑した表情になった。「じゃあ、どうして三十二匹のバッファリトの予約を受け付けたんですか？」胸腺をもう一度口へ運んだ。

ジェンセンがため息をついた。「昨日の午後までは三十二人の配達人がいたのです、コンロイさん。」

その瞬間、昨日密輸者が処刑されたことを思い出した。フォークを下ろす。食欲が急にしぼんでしまった。その三十二匹目のバッファロードッグは、地球にいる誰かにとって一千万クレジットの価値がある。そして不配達の罰金はジェンセンの会社にとって五百万クレジットの損になる。

「私は催眠術師なんです。バッファロードッグや配達人の仕事については何も知りません。」と俺が言った。

「知っている必要のあることはほとんどありません、コンロイさん。バッファロードッグは特に難しい世話を必要とする訳ではありません。宇宙船にバッファロードッグを運んで、一緒にキャビンに引きこもること。地球への渡航の間に過剰な酸素蓄積を防ぐため、空気制御装置を見張ること。そして、到着した時バッファロードッグを運び出すこと。配達人の役目はそれだけです。コンロイさんにも十分できるでしょう。」

「どうして他の誰かに免許を取らせないんですか？」と俺は聞いた。

「免許を申し込む過程は五年間もかかります。正直に言ってコンロイさんが免許を取れたことに驚いたのですが、文句を言うつもりは全くありません。ともあれ、アルコンはコンロイさんを公認配達人として認めているし、三十二匹目のバッファロードッグを地球に輸出するために満足させなければならないのはアルコンだけなのです。」

ジェンセンはテーブルのこっち側へパームパッドをずらした。見下ろすと契約内容が画面に光っている。「配達人を務めていただいたら、報酬として十万クレジットをお支払いします。」

もうじきブラックリストに載ってしまう一文無しの俺にとって、十万クレジットは大きな額だ。しかし・
・

「それは配達人の普通の金額なんですか？」ジェンセンが頷く。俺がためらって、契約を通読している振りをしながら、ギブラルでの最初のショーを思い出そうと頭を悩ました。皿の上の胸腺を見たとき、気が付いた。辛口のエジプト人。上体を傾けて、こうささやいた。「ハラペーニョ（訳注：トウガラシの一種）・オシリス（訳注：エジプトの神）。」

ジェンセンは目を閉じ、椅子に一気にもたれた。俺は彼のポケットに手を入れて、財布を探した。ばらばらと調べて、会社の身分証明書からファーストネームを調べ、個人のクレジットチップとビジネスクレジットチップの差引勘定もチェックした。「ケン」は掃いて捨てるほどの金を持っていた。

「俺の声が聞こえるかい、ケン君？」

「はい、聞こえています。」

「よし、よし。俺達はね、とても仲良しなんだ。わかるね？お互いになんでも話し合える。俺達の間には何も秘密がないんだ、ケンくん。秘密は全然ない。分かるね？」

「はい」と彼がつぶやく。

「じゃあ、教えてくれ。配達人の普通の給料はいくらだろう。ギブラルから地球までバッファロードッグを運ぶ場合、君の会社はいくら支払う？」

「五十万クレジットです。」と彼が答えた。とまどいは全くない。

「それなのに、俺にはその五分の一しか払わないつもりか。友達にそんなことをするのかい？ケン。なぜそんなことをしたのかな？」

目を閉じているにもかかわらず恥ずかしい表情をしながら、ジェンセンが肩をすくめた。「あなたが知っている訳でもないし、その文無しの状態なら十万でも飛びつくと思ったのです。」

「そりゃまあ、そうだな、ケン君。今日は運が悪かったしね。しかし、今度こそ運が開けると思うんだ。俺が三まで数えると、君の気が変わるんだ。君は本当に俺のことを騙したくないと思うようになる。俺が君の尻拭いをするんだってことに気が付いて、五十万クレジットを全部払うように契約を書き直す。そして、出発するまでの小遣いとして、俺に君のビジネスクレジットチップを渡してくれる。分かるね？」

「はい、分かりました。」

財布を元の場所に戻してから、俺は自分の椅子に戻って「一、二、三」と数えた。ケン・ジェンセンは直

ちに目をぱちくりしながら姿勢を直した。まるで、ちょっと居眠りしたことを誰かに気付かれたかと、辺りを見回している人のようだ。俺はパームパッドに視線を戻して、契約を読んでいるような振りをして頭を振った。「どうしようかな・・・」

「ちょっと返してください。」とジェンセンがいった。「契約条件を良くしましょう。コンロイさんが私達をピンチから助けてくださるのですから、五十万クレジットを払いましょう。」契約を直して、俺にパームパッドを戻した。パームパッドの上には、ビジネスクレジットチップが置かれていた。

「お仕事を受けましょう、ジェンセンさん。」と俺は言った。テーブルの向こうの顔にはほっとした満足の表情が浮かんだ。俺は同じ表情にならないだけで精一杯だった。

食事を再開する前に、ジェンセンが計画を話し始めた。どこでもいいからアルコンの公式の施設で俺が免許証を見せる。すると自由にバッファロードッグを選ぶことができる。地球への宇宙船に搭乗する前に、また免許証を見せてアルコンの税関職員から質問を受ける。そして、地球に到着したらすぐに五十万クレジットを受け取る。

正直に言って、食事の残りはゆっくりと味わった。食事を満身に味わうには時間を掛ける必要がある、ということを知っている程度には食道楽のつもりだ。ジェンセンが勘定を支払い済みだったが、彼のビジネスチップでチップを増やした。新しい職業が手招きしていた。これから配達人としての生活が始まるんだ。

配達人は皆、バッファロードッグを取る場所について色々な迷信を信じているようだが、俺から見ればどこでもいい。宇宙船は午前一時に出発する予定だから、十時間の暇潰しが出来る。ご馳走を頂いた後、ちょっとゆったりと散歩することにした。人通りは少なかった。バッファロードッグを小脇に抱えている配達人を数人追い越した。やがて、スペースポートの税関からもっとも遠い設備の前に出た。俺が窓口の前で足を止めると、中に座っている背の低いアルコンがつまらなそう目で俺を見つめた。

「あなたは配達人ですか？」と俺の顔をほとんど見ずに彼が聞いた。

「もちろん」と俺が答える。アルコンは手を振って俺を通してくれた。俺の言葉が真実なのは、彼らには火を見るより明らかなのだ。

檻の所へ短い階段を下りてドッグを捕まえる場所に出ると、そこは正にカオスそのものだ。オリンピックプールの大きさの浅い窪地に何千匹のバッファロードッグが鳴いたり、吠えたり跳ねたりしている。ホログラフィ表示が「火気厳禁」などの注意を映し、排気ファンは絶え間なくぶんぶんとホワイトノイズを鳴らす。遊び回っているバッファロードッグに六十センチの壁を乗り越えることは出来ないが、プール周囲をはっきり見渡すことは出来る。人類だろうがアルコンだろうが、近づく人にいそいそと走り寄る。十人程いた人類はみんな配達人だった。彼らがプールに手を出し、次から次へとバッファロードッグを持ち上げるのを眺めた。一匹を選ぼうと、両方の小脇に抱えてから目に覗き込んだり青い舌の色を点検したりしていた。迷信深い儀式に過ぎないが、真面目に守っているようだ。やがて配達人は皆ドッグを選び出し、手続きのため手が空いているアルコンに手渡した。

いろんなやり方を散々眺めてからお手本の通りに探し始めた。囲いに近付くと、元気で一杯のドッグが俺を見つけて、他のドッグを掻き分けながらいそいそと走り寄ってきた。そいつを持ち上げる。実にかわいい。本当に愛らしい。たとえ見苦しいほど醜くても五十万クレジットのためなら喜んで仕事するけど。

「おいで、かわいい子ちゃん。」赤ちゃん言葉を使いたくなる衝動をかろうじて抑えた。「お前でもいいだろう。」バッファロードッグは酸素のおならを出し、反対側からマーと啼いて小っちゃな舌を出した。群青色だった。いいだろう。見回して忙しくなさそうアルコンを見つけ出し、彼女へ歩き寄った。

「あなたは配達人ですか？」前に座っていたアルコンのようにつまらなそうな声で、彼女が聞いた。

「配達人です。」と答えた。「配達術のマスター、驚異のコンロイ。よろしくね。」彼女はちっとも面白くなさそうだ。

「このバッファロードッグでいいですか？」

「もちろん。」と俺が言った。「名前を付けるんですか？」

彼女は肩をすくめた。「そういう習慣です。診察をして不妊剤を投与してからタグを用意します。」俺の手からドッグを取ってその毛皮に医療用スキャナーを深く押し込んだ。

「じゃあ、レジャイナと名付けよう。レジャイナ・キャサリン・アルイジャス・ナンタケット・ビター・アーモンド・サンクワー。どう？長すぎる？」まあ、いいだろう。これで百万長者の半分になれるし、満腹だし、気分は極上だ。

アルコンは顔をしかめた。「もっと男性的な名前を付けることをお勧めします。選らんだのは雄ですから。健康状態は非常に良いですが、雌の方がお好みならこのバッファロードッグを戻して他のを選んで構いません。」

俺は肩をすくめた。「名前はいつでもいいだろう。こいつにする。『レッジ』と呼ぼう。不妊剤とタグをお願いしたい。」

彼女は首を振った。「タグはお付けしますが、不妊処理するのは雌だけです。」俺にバッファロードッグを渡した。「こちらに来て下さい。レッジのタグを用意いたします。」

五分後、俺は上機嫌でレッジを小脇に抱えながら施設をでた。ま新しいタグの青いプラスチックディスクがきらきらと耳からぶら下がっている。最初から最後まで、手順は十五分しかかからなかった。ポートへの道が遠くて、何回も尾行されているような気がした。税関に辿り着くと職員に見覚えがあった。俺が見た中で一番太っているアルコンで、それで最初の一週間のうちに彼をステージに上げて催眠したんだ。彼はころりとトランス状態になって面白かったようだ。ショーが終わった時、他のアルコンはしないことだが、舞台裏まで来て俺と握手した。今回も、窓口で俺の順番が来ると彼はまた同じことをした。アルコンで俺が見た中で二番目の微笑みも浮かべた。このアルコンは明らかに俺のファンだ。

「コンロイさんと当局とのトラブルは本当に残念でした。」と彼が言った。この一キロ四方の街では噂は光の速度で伝わる。ましてバッファロードッグに関する噂は光速を超えてしまう。「しかし、立ち直られたようですね。コンロイさんを通関させるなんて本当に光栄です。今回は配達人としての初めての旅行ですね。」

何千のトリガーフレーズとそれぞれの催眠術被験者を思い出すのに使う記憶法で、俺はもう一回記憶を探った。「ありがとう。今回が最初で最後にするつもりなんですけどね。私は本当に催眠術師なんですよ。セルギロさんでしたね？」

まるで俺のおかげでギブラールの王子様の後見人にでもなったみたいに、セルギロは顔を輝かせて居住まいを直した。「そうです、コンロイさん。私のことを覚えていて頂いて光栄です。とにかく、早速通関してしましましょう。簡単な質問を受けた上で宇宙船にお乗りになれます。よろしいですか？あなたは免許をもっている配達人ですか？このバッファロードッグを所定の手段で合法的に入手しましたか？配達するのはこの一匹のバッファロードッグだけですか？『はい』か『いいえ』でお答えください。」

俺は「はい」と三回答えた。質問に答えるたびにそのアルコンが俺の目から自分の目を離さずにならずいた。俺の心を覗き込み、真実を確認していたのだ。「これが不妊かどうか聞かないのですか？」とにっこりしながら俺が聞いた。

「それは必要ありません、コンロイさん。そのバッファロードッグは雄です。」

「その毛の下で、どうやってわかるのですか？」

「青いタグで。雄は青、雌は赤なんです。」

「それは便利ですね。」と俺は言った。

彼は俺の旅券をちらっと見て、時刻表を調べた。「コンロイさんの宇宙船は午前の一時に出発しますので、出発までゆっくりする時間は十分あるでしょう。もし何かがあったら、私は真夜中までここにおります。では、また会う日まで。どうぞご無事な旅を。」

数分後、俺は「ブセファラス」という宇宙船の中で個室にいた。アルコンにやって来た時は他の三人の客と共に使ったエコノミークラスの個室は、ジェンセン氏とワダ財閥の計らいで配達人が良く使うもっと広くてプライベートな部屋にアップグレードされていた。この新しいキャビンには、レッジのための檻と停滞ソファがある。そして、あいつのおならが問題にならないよう特別な空気制御装置も備えている。

リル・ドッグが当局に閉鎖されたとき俺の荷物は差し押さえられたが、俺の釈放と同時に開放されたようだ。ジェンセンの取り計らいでキャビンへ運ばれた荷物は、もうキッチンと整えられていた。レッジは幸せそうにマーと鳴きながら、檻の中に腰を据えている。俺は自分のソファで横になってこの数日の出来事を考え込んだ。確かに俺はもうすぐこれまでにない程の金持ちになるわけだが、その代わりもう一方ではおそらくブラックリストに載ってしまって、これからはショーを開けなくなるだろう。悔しい。先ほどそのアルコンに配達人になるより、催眠術師を続けるつもりだと言ったのに。しかし、ドッグ一匹当たり五十万クレジットなんて魅力的な話だ。「そうは言っても、催眠術師にとってそれは一体どんな人生なんだ？」と自問する。心の中に、配達人と催眠術師の二つのイメージを浮かべて、それを比較対照した。そして、あるアイデアが浮かんだ。リスキーなギャンブル。だが、両方の人生のいいところを組み合わせる。俺が処刑されずにやってのけられるとしたらだが。

ソファから立ち上がって、レッジの様子を見た。檻の中で、縮こまって毛布の上に寝ていた。キャビンの狭いトイレに潜り込み、鏡に映った自分を見つめる。新しいトリガーフレーズを作って、考えを実行しはじめた。

真夜中の三十分前、俺は「ブセファラス」を出て一番近い公式の施設へ急いだ。スペースポートからブロックだけ離れた施設は前のよりずっと大きい。人類とアルコンがぐるぐる駆け回る巨大なバッファロードッグの倉庫みたいな所だ。嘘をつかない限りは問題ないはずと考え、緊張を隠そうとした。ドアで証明書を見せて自分は配達人だと証明して、施設に入った。時間がないので、目移りしている場合じゃなかった。体長、体重、舌の色などのコンビネーションによって分けられたドッグは何十もの小さな檻に分類されていた。レッジの大きさと同じくらいのドッグを見つけてそいつを抱き上げ、檻の向こうにいる手が空いていそうなアルコンに向かった。

「あなたは配達人ですか」と聞かれた。俺は頷いた。「そのバッファロードッグに決めましたか。」また頷く。「はい、では渡してください。」プロらしい退屈な様子で医療用スキャナーを振るい、プリントアウトを見てから俺に振り向いた。「いい選択でした。この雌は全くの健康です。今から不妊剤を投与しますので、数分間お待ちください。」

がっかりしたふりをしながら、俺は「雌ですか？」と言った。「申し訳ないけど、私が欲しかったのは雄なんです。今日は金曜日で、雌にとって厄日ですから。これは元の檻に戻します。」

アルコンは肩をすくめて俺から離れた。他の配達人からもっとおかしい迷信を聞いたに違いない。彼にはやらなければならないことが幾つもあるって、ドッグを檻へ運んでいる俺に目もくれなかった。俺は足を止めることもなく、雌を戻すこともせず檻を通り過ぎた。必死の思いで、さりげなく歩くようにしながら出口へ向かった。誰にも引き止められずに無事に道に出た。こうして俺は密輸者になった。

スペースポートへの帰り道より長いブロックを歩いたことがない。また付け回されているような気がした。そして、角を曲がると視界の端に二人のアルコンがちらりと見えた。トリガーフレーズがブワッと頭に浮かび出したけど、まだ早い。十二時前には使えないんだ。代わりに俺はポケットから赤いタグを出し、それをバッファロードッグの左耳に付けた。タグによると、このバッファロードッグはカルラ・エスピノザというんだ。スペースポートに入り、複雑な排気管が何本もあるパブに立ち寄ってカウンター椅子に座った。客の大半は腕の下でバッファロードッグを抱え込む配達人だ。配達人達にとっては、地球への宇宙船に登場する前にバーで飲むのが習慣になっていた。アルコンのサイキック能力のおかげで、通関は効率いい。配達人はみんな十分以下で入れる。まあ「みんな」といっても、俺は待つしかない。真夜中の十二時までは、太った人懐こいアルコンのセルギロがまだ仕事だ。彼は間違いなく俺のことを覚えている。ばか高いビールを注文して、ワダ財閥のチップで払った。念のため、三十分経つまで待とうと思った。俺が二本目のビールを飲んでいたら、四人のアルコンがパブに入った。その中にはロヨカもいた。

「バッファロードッグを置いて、バーから出る！」

他の配達人達はまったく驚いていないようだった。バーにいた者はみんなドッグを置き、手を見せながらバーから出た。なだめるようにカルラ・エスピノザの羊毛のような髭の下にボウル一杯のピーナッツをすらした。今だ。「スプモニ（訳注：カクテルの一種）・ハイムダール（訳注：北欧の神）」と俺は自分にささやいた。目をぱちくりして、ちょっとよろけた。何か起きたけど俺には良くわからない。

他の配達人を無視して、ロヨカが俺に詰め寄ってきた。「あなたのことを監視すると言ったでしょう、コンロイさん。それはあなたのバッファロードッグですか。」

「そうですよ。」と俺は答えた。「まあ、厳密に言えば、ワダ財閥のバッファロードッグですけど。私はただの配達人です。」

「最近密輸者として有罪判決を受けた配達人を雇ったワダ財閥ですね。偶然にしては変だとは思いませんか？コンロイさん。」

「いや、まったく。その配達人は処刑されましたね。ワダ財閥はすぐにもう一人の配達人が必要になった。そして、私は免許を取得していた。雇われるのは当然でしょう。」

ロヨカが俺を押しつけバーに近付いて、耳に付けたタグが読めるようにバッファロードッグを取り上げた。ピーナッツから引き離されたドッグは迷惑そうにマーと鳴いた。

「これはカルラ・エスピノザですか？」ロヨカの目が細くなった。

「ええ、そうです。」と俺は当惑した顔で言った。

「これは昨夜のショーで舞台にいた女だと言うのですか？」

俺は笑った。「いいえ、違います。これは公式な設備から選んできたバッファロードッグです。あの女の名を取って名付けただけですよ。」

それを聞いて、ロヨカはぶつぶつ言いながら俺の胸にバッファロードッグを突っ込んだ。「では、無事に通関させましょう、コンロイさん。宇宙船に乗り遅れては大変ですからね。」彼が俺の両側と後ろに立っていたアルコンの方へ頷いてから、俺達は一緒に税関へ進んだ。

時間は十二時を過ぎ、窓口の職員は背が低く魅力的な女性で人類みたいに見える。列に並んでいると「セルギロ」という名前がなぜか浮かんだけど、理由はわからない。確か、このアルコンと会ったことはないはずだ。アルコンがみんな俺のショーを見にきた訳じゃない。順番が来ると俺は免許証を見せた。

女性のアルコンは免許証を、俺を、そしてロヨカ達を見た。俺のことがはっきり見えるよう、ロヨカは職員の傍に立ちに行った。「コンロイさん」と職員が免許証の俺の名を見て言った、「三つの簡単な質問をします。「はい」か「いいえ」でお答えください。あなたは免許を保有する配達人ですか？このバッファロードッグを所定の手段で合法的に入手しましたか？配達するのはこの一匹のバッファロードッグだけですか？」

「はい、私は免許を持つ配達人です。はい、私は所定の手段でこのドッグを入手しました。はい、配達するのはこのバッファロードッグだけです。」

あっけにとられた顔をしているロヨカは俺をまじまじと見つめた。職員が頷いて手を振ったので通ろうとしたが、ロヨカが俺の腕を掴んだ。

「もう一つお聞きしたい。」ロヨカが燃えるような目で俺の目を覗き込んだ。「コンロイさん、あなたは密輸者ですか。『はい』か『いいえ』で答えなさい。」

彼の手を押しやった。「それはもう聞いたでしょう。私は密輸者じゃない。」

目を瞬き、連れてきたアルコン達の方に振り返った。三人が少しだけ頭を振った。ロヨカがまた俺に向い

た。「すみませんでした。コンロイさんのことを勘違いしたようです。気を悪くしないでください。」
「わかりました。これがロヨカさんのお仕事ですからね。いいでしょう。これで済みましたか？」

「ええ。ではコンロイさん、安全なご旅行を。」そして俺に背中を向けて、三人の仲間達と同時に帰って行った。職員は当惑した目でこちらを見ると、列の次の人を手招きした。俺はカルラ・エスピノザをしっかりと抱いて、宇宙船に搭乗した。

指定されたキャビンに着いて、ドアを開けた。最初は部屋を間違えたのかと思った。でなければ他の配達人が誤って俺の部屋に入ったか。どういうわけか、檻の中に間に合わせの加速ソファに留められたバッファロードッグがいた。部屋を出ようと振り向くと、さっきは気付かなかったがドアの裏に手作りの張り紙がピンで留められているのが見えた。大きな太い文字で「スプモニ・ハイムダール」と書いてある。一瞬の目まいがして目蓋を閉じてから、ここはやはり正しい部屋だということを思い出した。鍵をかけて、空気制御装置を調節しに行った。

何時間か後、「ブセファラス」がもう地球へ出発したかなり後に、ギブラールのバッファロードッグ設備から一匹のドッグが行方不明になったことが分かった。レッジとカルラは仲良くして、ギブラールの外で生まれる初めての仔ドッグを熱狂的に作ろうとしていた。配達人にとって、レッジには五十万クレジットの価値がある。密輸者にとって、もう一匹のバッファリトを手に入れた価値は一千万クレジットになる。しかし、俺は催眠術師だ。そして地球で唯一の子供が産めるバッファロードッグを持っている。俺は好きな値段を付けることができるだろう。これはショービジネスさ。

完